

男は 痛い !

國友万裕

第1回

悪人

今号から連載に参加させていただくことになった。簡単に自己紹介をしておくと、ぼくはもうすぐ48歳。独身。職業は大学の非常勤講師。専門はアメリカ文学・映画・ジェンダー。ぼくは少年時代に重いトラウマを負い、いまだにそこから立ち直ってはいない。あえて、定職を見つける努力もせず、結婚もせず、女っけのない生活をしてきたのも、少年時代のトラウマを乗り越えることができないことが、ひとつの原因だった。自分を変えようと努力しなかったわけじゃない。ぼくは30過ぎてからの18年間で、10人以上のカウンセラーにつき、心療内科で薬ももらい、男性運動にも参加し、念願になって、本も出した。人づきあひもたくさんしてきた。ぼくを可愛がってくれる先生も何人もいるし、一緒に飯や風呂に行く、友達も何人もいる。

とりわけ、大親友とは10年以上のつきあいだ。でも、その彼にさえ、ぼくはまだ少年期のトラウマを具体的には話していない。彼は援助職ではないし、一流の高校から一流大学に入り、エリートコースを生きてきた人だ。ぼくの過去を知ったら、もう友達ではいてくれないのではないかと、という心配がよぎる。ぼくは、少年時代に重い十字架を背負わされた。それが原因で、ぼくは、自分は半端者だという低い自尊感情から抜け出すことができないのだ。

今更、新たなカウンセラーを見つけても、もう得られるものはないだろう。心療内科の先生からも、「あなたはもうクライアント経験のプロだし、カウンセリングの限界だよ」と言われている。これからは自分に頼るしかない。援助に関連しているものだったら、条件は問わないとのことだったので、ぼくは、この連載を続けていくことで、自分を援助していきたいと思っている。

自己援助の方法として映画を使おうと思う。気

に入った映画、とりわけ男性主人公に同一化できた映画を主として使っていきたいと考えている。男性主人公に同一化できる映画は、ぼくの抱えてきた問題を、その主人公も共有しているということで、「つらいのは、俺だけじゃないんだ」という気持ちにさせてくれるからである。

さて、第一回は『悪人』(李相日監督 2010)を見て思ったことである。

ぼくが生まれたのは九州の熊本市。ぼくは京都の大学に入るまでの19年間、この土地で過ごした。『悪人』を見て、何よりも思ったのは九州の風土だった。これは僕が九州を背負っているから感じるのだろうか。ここには確実に九州の匂いがある。とはいっても、この映画の舞台となるのは、佐賀と長崎で、同じ九州でも、熊本や鹿児島ほど九州的な土地柄ではないと聞いている。佐賀は都会である博多が近いし、長崎は港町でバタ臭いイメージだ。

でも、これは九州らしい話なのである。原作・脚本の吉田修一も長崎の出身だし、製作者側も、九州の風土を描くことを意識していたのではないかと思われる。主役の妻夫木聡(福岡出身)、深津絵里(大分出身)を始め、三石研(福岡出身)、宮崎美子(熊本出身)など、脇役も九州出身の俳優が多く出演している。

1. 男尊女卑という名の男性差別

ぼくが九州の出身だというと、たいていの人は、「じゃあ、九州男児なんですね。そうは見えないけど(笑)」と反応する。実際には、九州の人は、自分のことを九州男児なんて言わない。他の地方の人たちが勝手にイメージしているだけのことだ。男尊女卑的で、日本男児的で、寡黙な男というイ

メージがまず頭に浮かぶのだろうか？九州が男尊女卑であることは、ぼくも認めるのだが、しかし、ぼくが問いかけたのは、「男尊女卑が、男にとって、良いことなの？」ということだ。

ぼくは、自分が男だってことを受け入れるのに膨大な時間がかかった。

普通の人は、そんなことは意識しないで生きている。人間の人生には、その人の素因と環境、それから運命が影響するとぼくは思っている。ぼくの場合は、たまたまジェンダー・センサティブな素因をもち、たまたま生まれ育った環境が超ジェンダー主義的な環境で、さらに悪い時には悪いことが重なるという運命で、ジェンダーにもがき苦しみ、結局、まだ引きこもりや不登校という言葉もない頃、自分の殻に引きこもってしまった。

ぼくは物心つく頃から、スポーツや喧嘩ができず、女の腐ったような子だと言われ続けた。しかし、小学校3年までは曲りなりに普通の男の子だったと思う。仲良し4人組で遊びまわり、仮面ライダーやウルトラマンに夢中になっていた。

そのぼくが、自分が男だということを理不尽に感じ始めたのは、小学校の4年生ころからだった。4年生になって組替えがあり、担任の先生が変わった。30代半ばの女の先生で、「男の子は将来、一家の大黒柱にならなきゃいけないのよ」が口癖。当然のように女子よりも男子に厳しくする。男子にのみあたえられる厳しい体罰の日々。顔が腫れあがるまで殴られた子もいた。一方で、女子はどれだけ反抗しても、殴られない。男はわずかなことでも、彼女の気分次第で殴られる。しかし、彼女に悪気はない。彼女は、「女よりも男のほうが大事、だから男子には厳しくしてあげているのだ」と思っている。「女はどっちみち、男にのっかっていればいいんだから、適当に甘やかしていればいい

のだ」と……。

運が悪いことにこの先生の担任は6年生まで3年も続いた。5年生の頃からだろうか。ぼくは次第に男子の仲間から外れ始めた。男子と遊んでいると殴られる危険性が出てくる。いつしか僕は女子たちと遊び始めた。女子と一緒にいたら、ちょっとくらい悪いことをしても殴られる危険性はなかった。まさか同じことをしているのに、男のぼくだけ殴って、他の女子たちは殴らないなんて、そこまで不平等なことは、さすがのこの女の先生でもできなかった。あの当時のぼくには、女の子たちがシェルターだったのだ。しかし、女子とばかり遊んでいるぼくを、他の女子たちは「おかま」とからかい始めた。確かに、あの当時のぼくは、半分は女子に同一化していた。

そして中学へ。中学になると、一気に雰囲気は変わる。女の世界から男の世界への移行。女性の先生が過半数の小学校から、男の先生が支配する教育へと変わっていく。男子生徒たちも、一気に男になっていく。そのなかで、女子に同一化していたぼくは、もはや女子の仲間にも入れない。他の男子とも同一化できない。自分の夢想の世界の中で遊ぶしかなかった。

ここで、また不幸な出会いがぼくを待っていた。中学2年の時にやってきた体育教師だ。大学を卒業して、教員採用試験に落ち続け、5年くらい浪人したらしい。まだ20代後半で、この時が初めての正式な教員としての就任だった。この人を始業式で見たときから、何らかのトラブルが起きそうだと予感していた。見ただけで怖いような番長のような風貌。人の気持ちを理解する気はない。俺が一番なんだ。俺のルールはお前のルールなんだという態度。

この教師が、男子全員上半身裸で体育の授業

をすと言いだしたのは、受験を間近にひかえた中学3年の秋のことだった。ぼくは、女子に同一化していたので、元々、肌を見られるのは恥ずかしかった。プールの時間は仕方がないけども、普通の体育の授業まで上半身裸でするなんて、何の必然性があるのか。この先生曰く、「受験にそなえて、身体を鍛錬するため」とのことだが、これは何の根拠もない言い訳に過ぎないことは、中学生のぼくにもわかっていて。この先生はマッチョ・フリーク、男子全員を裸にして自分のマッチョ大好き欲望を満たそうとしていたのだ。

九州でも冬は厳寒だ。寒いつらさもあるが、何よりも、全員裸なんて言う状況は、恥ずかしいを通り越していた。男子校ならまだしも、女子たちの目がある。極めつけは、学校のグラウンドではなく、学校の外を裸で走らされたことだ。「いくらなんでも、行き過ぎだよ」と他の男子たちもぼやいていた。でも、彼らは恥ずかしいという感情よりも、男の一員でいたいという思いのほうが勝っている。それでやむなく教師に従い、上半身裸のまま外を走らされることになった。通りかかったおばさんたちがあきれ顔で見ていた。ぼくはというと、断固として裸になることを拒否し、必死の思いで教師に嘆願し、シャツ一枚を着用させてもらった。男であることを拒否したのだ。あの時のぼくを嘲笑う教師の顔。あれは教育者の顔でも、人間の顔でもなかった。男性的な支配力で周囲を威圧できる男は、どれだけ非人間的なことをしても、許されてしまうのだ……そのことをあの教師から教えられた。

ぼくは一気に自分の心のバランスを崩していった。受験前だというのに成績は一気に下降し、何度も職員室に呼び出される日々。母には悲しい顔をされる。クラスメートたちはますます遠い存在となった。志望ランクを落として、高校には合格し

たものの、ぼくは学校に行くことができなくなった。当時はまだ不登校なんて言う言葉はない。近所の人たちからは白眼視された。精神科に行っても話にはならず、地元の公立の相談所に通った。

ここでまたも不幸な出会いが起きる。担当のカウンセラーである。当時、30過ぎの男性。地元の高校から熊大を出て、そして、公務員になったみたいだ。おそらく、最初からカウンセラーになりたいなんていう気持ちはなかったに違いない。配属されてから、心理の勉強を始めたのだろう。頭もよくて、スポーツマンで、鈍感で、間違っても不登校になるような性格の人ではなかった。

ある時、ぼくはこのカウンセラーに、「ぼくは映画が好きだから、脚本家になりたいんです」と話した。もちろん、脚本家なんて誰でもなれる仕事ではないことは、ぼくだってわかっている、ただ夢として言ったことだった。ところが、思わぬ反応が返ってきた。このカウンセラーは、真っ青になって、「大人になったら、女房子供を食わせなきゃいけないのに、そんなバカなことを考えて」と必死になって、ぼくの夢を壊そうとするのだ。夢を持つこと自体が罪悪だとこの人は思っているみたいだった。ぼくは、この先生にスリッパを投げつけた。この先生は夢を見ることの価値をまったくわかっていない。そんなものは時間の浪費だと思っている。そして、「食わせんといかん」という言葉。この人は、「男子、扶養者たるべし」という考えを、何の疑問も感じずに受け入れていた。こんな人にぼくが心を開けるわけがなかったが、当時は熊本で他に少年のカウンセリングをしてくれる場所はなく、仕方がないから、2年ほど、ぼくはこのカウンセラーのところに通うことを余儀なくされた。

体罰に耐えろ！上半身裸になれ！！ 家族を食わせんといかん！！ こんなことを女子が言

われるだろうか。男であることは理不尽だ。九州が、男尊女卑であることは事実だと思うが、男尊女卑であることはむしろ男にとって悲劇だ。男は家畜のような扱いを受けるのに、一方で、男は女よりも偉いんだという価値観を内面化していなくてはならない。なんという矛盾。

ぼくの九州での体験を話すと、「やはり九州は保守的だねー」「一体、いつの時代のことなの？」「ぼくたちの頃は体罰なんてなかったよ」「皆の前で、裸になれてー。熊本ってそんなとこななの？」「そのカウンセラー、ちょっと変だよ。カウンセラーとしては下の下だよ」と驚きの言葉を漏らす人は少ない。

もちろん、ぼくの経験は個人的な経験だ。九州に育った人が必ずしも同じ目にあってきたわけじゃない。他の地方であっても、同じような体験をした人はいるに違いない。また人間の心というものは変わるもので、出会う時期が違っていたら、ぼくは、九州の人たちを受け入れることができたのかもしれない。そのことがわかっていながら、九州を未だに蔑視しているぼくは大人げないのかもしれない。自分の世界を狭くしているのかもしれない。しかし、ぼくの九州に対する憎しみは今も消えてはいない。ぼくの九州での少年時代は、不幸な出会いにばかり満ちていて、幸せな出会いは思い出せないくらいに少ないのだ。

2. 怒ることしか許されない男たち

ぼくは、子供の頃、「男は三年に三口」という言葉を教えられた。これは全国的な言葉なのかと聞いていたら、そうではないらしく、関西の人たちは、そんな格言聞いたこともないという人もいる。

九州では、男は寡黙でなくてはならない。一般

に九州の男は、感情表現が下手だし、それを禁じられる。「男は泣いちゃいけない」「へらへら笑っちゃいけない」……『悪人』で、まず九州らしさを感じたのは、主役から脇役の人物にいたるまで、男たちはほとんど泣かない・笑わないということである。

娘の佳乃(満島ひかり)が殺された後、父親の石橋佳男(柄本明)は、いつまでも取り調べられない警察を激しく怒った後で、男泣きにむせぶ。また、1シーンだけ登場するバスの運転手は、殺人者・清水祐一(妻夫木聡)の家族としてマスコミに追いかけられる祖母房枝(樹木希林)に、「あんたが悪いわけじゃなかったけん。しっかりせないかんよ」と言葉をかけ、思いやりを示しながら、顔は彼女のほうを見ようともせず、厳しく叱ったような言い方をする。男たちは、泣きたくても、やさしい感情をもっている、表向きは怒るという表現しかできないのだ。もっとも、普段は怒ったような顔の男たちだからこそ、男泣きや思いやりのある言葉が、よりいっそうに真実味を帯びて感じられることは確かで、九州男児が、男性からも女性からもかっこ良いと見られてきたのは、そういう部分なのだろう。運転手の横顔に既視感があって、「九州は相変わらずだなあ」と苦笑いしてしまった。

映画の男性登場人物のなかで、わずかに泣いたり、笑ったりの場面が出てくるのは、佳乃が好きになる、金持ちの大学生・増尾圭吾(岡田将生)だが、彼が泣くのは、警察に佳乃殺しの容疑者として捕まる場面であり、「男のくせにみっともなく泣きやがって」というセリフが出てくる。一方で、彼が楽しそうに笑うのは、容疑がはれて、死んだ佳乃を「あんな女……」と嘯きながら、仲間と盛り上がっている場面である。死人に平気で鞭を打つ、彼の無神経さに思わず激しい反発を示す同級生が

描かれる。すなわち、彼の泣く・笑うという行為は、むしろ軽薄な泣き笑いとして描かれているのだ。

主役の祐一の台詞もきわめて少ない。妻夫木聡といえば、息子にしたいような、可愛らしい好青年というイメージがあって、『ウォーター・ボーイズ』(矢口史靖監督 2001)『ジョゼと虎と魚たち』(犬童一心 2003)など、他の映画では、むしろ饒舌で表情豊かな役が多いのだが、この映画に限っては、例外的に無口で無表情である。彼にとってはイメージチェンジの役であり、この話自体も、彼の他の映画でのキャラクターがその背後に見えるからこそ成り立つ。妻夫木は悪人には見えないし、怒ったような顔を男の美学とする男にも見えない。彼をこういう表情にってしまったのは、やはり、九州なのではないかと、アンチ九州のぼくは、考えてしまうのである。

3. 遠い東京

主役の祐一と光代(深津絵里)を結びつけるものは、出会い系サイトである。しかし、2人とも出会い系サイトで出会った相手と遊ぶような性格の人物じゃない。男のほうは仕事が終わると、風呂と飯と病気の祖父のために病院通いするしかない土木作業員。女のほうは、同居している妹は彼氏がいるのに、自分はひとりでケーキをかじるしかない紳士服店勤務の女性。いまだき珍しい大和撫子風のしとやかな女性として登場する。この2人がなぜ出会い系に頼るかというと、2人とも自分から積極的に異性と付き合えるような性格ではないからである。

映像的に印象的なのは、1人でケーキをかじっている光代の表情が、アップで丁寧に撮られ、ふと妹の部屋をみると布団がよじれている。すなわ

ち、彼女の留守中に妹が彼氏とセックスをしていたことがわかる。パシッと障子をしめる彼女。この一場面で彼女が性体験が少なく、古風な女性であることが示される。

祐一を描く場面で印象的なのは、祐一の大叔父である憲夫(三石研)とのやりとりの場面だ。パンツ一枚の祐一が外風呂へ向かおうとしていると、憲夫から声をかけられる。恥ずかしそうに身体を隠しながら、祐一は俯きがちに風呂へと向かう。頭はヤンキ ふうに金髪に染めておきながら、自分の貧弱な身体を隠す祐一は、シャイな大人しい青年であることが示唆される。また外付けの風呂がついているところも、九州らしいのではないか。

光代は妹を世話する立場にいる、祐一は祖父を世話する立場にいる、すなわち、家族の犠牲になっているような存在だ。この2人が恋に落ちるのは、何よりも同じような境遇であるがゆえにシンパシーを感じるからだろう。

2人が駅で初めて会う場面では、いきなり、祐二から「ホテルへ行こう」と誘われ、光代は戸惑いながらもそれに応じてしまう。この時、祐一は、佳乃を殺した後なので、どうすることもできない思いをセックスで紛らわしたいという気持ちもあったに違いないが、それと同時に、九州男児らしく口下手な彼は、光代のお喋りに上手く付き合っていく自信がないように見える。出会い系サイトに頼るのも、出会い系に登録するような女性だったら、セックスを求めても、文句は言わないだろうという思いもあるからだろう。また一方の光代も、これまでの大人しい生活からどこかで抜け出したいという願望をもっていただけのために、受け入れてしまう。彼女自身も迷懐するように、真面目な交際相手を求めて、出会い系サイトに頼るなんて、「ダサイ」のだ

が、そうでもしなければ、友達も見つからないのが彼女の現実なのである。

車のなかでの2人の会話は2人を心情を見事に表現している。

光代:私、金髪の人と付き合うなんて思わなかった。

祐一:いや、鏡見たら、急に变えたくなくて。

光代:その気持ちわかる気がする。

2人とも閉塞的な生活から抜け出せない自分から脱皮したい。その思いが胸に鬱積しているため、突然、火種に火がついたように柄にもないことをしてしまうのである。出会い系サイトや金髪は、逆説的に彼らの抑圧された生活を物語ることになる。

この映画では、祐一が佳乃の下着姿の動画を見つめている場面や、光代からのメールを受け取る場面などに携帯もひとつの重要な小道具として使われている。今は以前にも増して、コミュニケーションや情報が伝わるのは速くなっていて、地方にいてもすぐに情報が得られることは事実だ。しかし、その一方で、地方には文化イベントや娯楽施設が少ないため、文化を十分にエンジョイすることもできない。また九州の場合は、中央から離れているため、東京の情報は知っていても、東京まで頻繁に行くことはきわめて難しい。

ラブホテルでセックスをした後、ふたりはこういう会話を交わす。

光代:ねえ、ここに来る途中、安売りの靴屋があったやろ。あそこを右に回ってまっすぐ田んぼの中を進んだところが私の高校だったとよ。そのちょっと手前に小学校と中学校……今の

職場もあの国道沿い……なんか考えてみたら、私って、あの国道から全然離れんやったとねえ。あの国道を行ったり来たりしよっただけで……。

祐一：俺も似たようなもん

光代：でも、海の近くに住んどっとやる？ 海の近くとか羨ましかあ。

祐一：目の前に海のあったら、もうそん先どこも行かれんような気になるよ。

光代が勤務先のウインドウから、ふと雨のなかに放置されている一台の自転車を見つめる場面が挿入されるが、この自転車は光代や祐一の状況を物語る指標である。人通りもないところにポツンと置かれて、雨に濡れながらも、動くことはできない自転車……それは2人に似ているのである。

もう20年以上前に、根岸吉太郎監督の『永遠の1/2』（1987）という映画があった。これも九州の話だが、今でも覚えているのは、大竹しのぶが津田塾大学卒業後、九州に戻ったという設定になっていて、そのことを彼女が恋人の時任三郎に話すと、「すごいなあ」と彼が言う。「東京出るなんて」と……。 「大学のことじゃなくて……」と大竹。

彼女は、おそらく優等生で、東京の大学に出してもらえたのだろう。しかし、それほどの優等生でもなかった彼のほうは、東京なんて夢の夢なのである。

思えば、地方分権は、ぼくが学生の頃から訴えられていた。なのに、東京一極集中は緩和されるどころか、拍車がかかるばかりだ。埼玉や千葉、栃木や茨城は東京のサテライト。さらにサテライトは広がっていて、今となっては、山梨や長野から

東京に仕事で通っている人も少なくない。しかし、九州は東京のサテライトにはなり得ないだろう。『悪人』では、都会と地方の対比は描かれてはいるが、東京ではなく、博多との対比ということになっていることに注目してほしい。東京や大阪は距離的に遠いため、九州人には博多が東京に代わる華の都会である。

そうそう、ぼくが大学に入るときのことだ。予備校の先生は、保護者も一緒に進路指導面談で、母に言ったものだ。「博多の西南学院大学でもいいんじゃないんですか？ 東京や関西に出るよりも、博多くらいのほうが安心ですたいね」

4. 男性被害！？

『悪人』というタイトルがついたこの映画だが、主役の殺人者・祐一は、同情的に描かれる。彼が「悪人」でないことは言うまでもない。それでは、一体、誰が悪人なのか？ 誰とも言えないだろう。おそらく原作者も監督も、誰が悪人だとも思っていない。人間は誰しもある面で加害者（悪人）であり、ある面で被害者でありうるということが、『悪人』の描きたいところではないかと思われる。

この映画の優れたところは、脇役にいたるまで、ひとりひとりの登場人物を存在感たっぷりに描きこんでいて、それぞれの人物の生活感が垣間見えるような演出と演技がされるため、誰が悪人とも断言できないようなニュアンスを残しているところである。

強いて言えば、おそらく多くの観客たちは、殺された（ということは、もっとも被害者であるはずの）佳乃が一番悪いと感じるだろう。あるいは、彼女を夜道に放り出してしまった圭吾に批判の目を向けるかもしれない。

事件の起きた夜。祐一と会う約束をしていた佳乃は、偶然、圭吾と会って、祐一はほったらかしにして、圭吾の車に乗ってしまう。佳乃は圭吾が好きなので、助手席から運転している圭吾にあれこれ話しかけるのだが、圭吾は彼女の態度がなんとなく気に入らない。「にんにくの匂いがする」と餃子を食べてきたばかりの佳乃を咎め始め、「アンタなんか安っぽか。アンタ、なんでよう知りもせん男の車に、こうやってひょこひょこ乗ってくるわけ？ 女なら、普通断るやろ。アンタみたいな女、正直、俺タイプじゃないっていね。降りてくれん？ 自分で降りんなら、俺が蹴り出しちゃうか？ その変にたっとれば、誰か乗せてくれるさ。アンタ、誰の車にでも乗るんちゃう」と、彼女が女性でありながら、性的に放逸で、男への警戒心などが全然ない女性であることに嫌悪感を催し、強引に彼女を車から降ろしてしまう。

夜道でひとりしゃがんでいる佳乃を車で追ってきた祐一が、「大丈夫？」と自分の車で送ろうとするのだが、佳乃は、「人殺し！ 警察に言ってやるけん！ 襲われたって言ってやる！ 拉致されて、レイプされそうになったって！ 私の親戚に弁護士おるっちゃけん。馬鹿にせんでよ！ 私、あんたみたいな男と付き合うような女じゃないっちゃけん！！あんたなんか誰が信じるもんか」と冷淡に突き放す。その後、怒りにかられた祐一は、佳乃ともみ合いになった末、心ならずも彼女を殺してしまう。

佳乃はセックスを楽しむことに対する罪悪感がまったくない女性で、祐一は、佳乃に言わせればセックスが上手いことだけが取り柄なので、セックスフレンドと割り切って付き合っていたのだ。かつては、男は愛がなくてもセックスができるが、女はセックスだけを切り離すことはできないのだと言

われたものだ。しかし、『婚前特急』（前田弘二 2011）など、最近の映画では、心と身体を切り離して考える若い女性は、むしろ現代的に肯定的にとらえられたりもする。フェミニスト的に考えるならば、男は複数の女性とセックスを楽しむことが許容されるのに、女には許されないというのは、男女不平等である。佳乃は性に対する考え方が自由奔放なだけのことで、何も悪いことはしていない。むしろ、上にあげた圭吾の台詞には、彼の男尊女卑的な古い女性観がくみ取れて、彼が事件の原因をつくった人物であると思う人もいるだろう。

しかし、祐一は、どうだろうか。彼は佳乃の奔放さを咎めてはいない。彼は、むしろ、彼女が安易に約束をやぶったことに傷ついてしまったのだ。

祐一は、子供の頃に、両親が離婚し、母からはほったらかしにされ、祖母に育てられたという設定になっている。幼い祐一は、母親との約束通り、灯台を見ながら、母が戻ってくるのをひとりぼっちで待ち続けた。しかし、母は結局、彼を迎えにはこなかった。祐一は、「お母さんは戻ってくる！」と大人たちに訴えたのだけど、誰も信じてくれなかった。そのトラウマがいまだに彼を苦しめている。一番、自分を愛してくれるはずの母から捨てられる、さらに誰からも信じてもらえない、俺は誰からも愛されない人間なのか……その孤独感は長い間、彼のなかに亡霊のように住みついていたに違いない。そのため、祐一との約束を平気で破り、さらに「あんたなんか誰が信じるもんか！」と叫ぶ佳乃に、祐一は母に捨てられた記憶をオーバーラップさせてしまい、激しいフラッシュバックの末に彼女を殺してしまうのである。言いかえれば、祐一は、女性から2度の精神的なレイプを受けてしまったのである。

ぼくは、以前、あるフェミニストから、「被害者の

権力」という言葉を教わったことがある。「私たち(女)は、被害者なのよ。あんたたち(男)は加害者なんだから、文句を言っても信じてもらえないのよ」という理論だ。上にあげた佳乃の台詞は、まさしく被害者の権力の濫用の一例である。もっとも、九州の女性の場合は、被害者の権力というよりも、「弱者の権力」を悪用するケースが多いように思える。なるほど、確か長崎出身の村上龍も言っていたと思うけど、九州の女は「男でしょ!」「男のくせに…」という言葉が頻りに口にするし、男にプレッシャーをかけようとする傾向が強い。九州は、表向きは男が威張っているように見えて、実は女も男尊女卑を利用しているというのが実情なのだ。

フェミニズムを批判するわけではないが、フェミニストが「男・加害者 女・被害者」という図式を広めてしまったため、「女・加害者 男・被害者」というケースはなかなか認めてもらえない。それを真正面から描いている映画は『それでもボクはやってない』(周防正行監督 2007)だが、『悪人』にも、女性に対する批判が垣間見えてくる。日本は欧米に比べれば、ジェンダー意識が遅れていると言われるが、日本でも徐々に男性被害は映画に描かれるようになってきているのである。

祐一の母親・依子は、映画では1シーンしか出てこないが、余貴美子が存在感たっぷりに演じている。祐一は、房江たちの目をしのいで、時々、彼女と会っていた。「私だって、祐一には悪かことしたと思っている。だけん今でも会うたびに、涙流して謝っとるよ。あん子はお金せびるとやけんね。ぎりぎり生活しよる私から1000円でも、2000円でも!!」と徐々に房江の前に現れた彼女は、自分もつらい思いをしているのだと訴えるのだが、実は、原作には、さらに説明が加えられていて、

祐一が母にたまに会って1000円、2000円せびるのは、母を被害者に見せるための彼なりの思いやりであることが語られている。「どっちも被害者になれんですから」と……。祐一は自分から加害者の役を買って出てしまっていたのだ。

映画の終盤、警察に追われる祐一と光代だが、ここで、祐一はなぜ、衝動的に光代を殺そうとするのか? それは彼女を共犯者にしたくないからである。ここでも、祐一は、自分が加害者になるうとするのだが、それは何故なのか? 深読みをするならば、九州の男尊女卑的な教育のせいで、無意識のうちにそういう選択をしてしまうのではないか。九州は、男が被害者になることは許されない。そうであるのならば、光代には迷惑をかけたくないと……。

祐一は、光代と初めてホテルで過ごした後で、「これしかないんだ」とすまなさそうに彼女にお金を渡す。この場面でのセックスは、彼女の合意のうえでのことであり、お金を払わなくてはならないということはない。むしろお金を払うと、彼女を娼婦扱いしたことになり、彼女の自尊心を傷つけてしまう。しかし、祐一が律義にお金を払ってしまうのは、自分に自信がないからだ。俺みたいな男は、お金を払わなければセックスはさせてもらえないのだ……。

要するに祐一は、自尊感情が低いのである。そして、祐一の自尊感情の低さは、母に捨てられたトラウマが根源的な原因であると思われる。そうであるのならば、この映画の悪人は依子とすることもできるかもしれない。「早くに、光代と出会っていたら……」というセリフを祐一は口にするが、男に自己肯定感をつけさせるのは女性(光代)であり、またその肯定感を潰してしまうのも女性(依子・佳乃)なのである。そのことを女性たちに考え

て欲しいなあ。

男性ジェンダーの被害者であるぼくは、基本的に女性に対して厳しい。したがって、すぐそういう解釈をしてしまいたくなる。でも、それを言うとフェミニストから、「あなたが女性を下位の者であるべきと考えているから、そう感じるんだ」と怒られてしまう。「別に下位の者とは思っていないよ」と訴えても、納得してもらえない。フェミニストを怒らせずに、ぼくの気持ちを訴えていくには、「男は痛い！」ということ、映画という多くの人が共有する媒体を通して、あの手この手で語っていくことだろう。

次号でも、そういう作品をとりあげてみたいと思っている。本当に男は痛い！！

(この文を書くにあたって、映画の他に『悪人(上下)』『悪人 シナリオ版』(朝日文庫)を参照した)

